

英語学習におけるリスナーシップ*

難波 彩子

岡山大学言語教育センター

〒700-8530 岡山市北区津島中 2-1-1

E-mail: anamba@okayama-u.ac.jp

あらまし 本稿は会話の相互構築に向けた聞き手の貢献, 「リスナーシップ」が日本人大学生に対する英語教育でどのように応用することが可能であるかについて検討する. 具体的には (1) 談話分析を通して, リスナーシップを英語学習にどのように役立てることができるか, (2) リスナーシップは日本語話者のコミュニケーションスタイルとどのように関連するのか, (3) リスナーシップは, 英語で他のクラスメイトとコミュニケーションを図ることに対する学習者の意欲に関してどのように貢献することができるか, 以上3点について調査を行う. これらの問いに答えるために, 日本人大学生を対象とした英語授業におけるスピーキング活動, 特にグループによる英語発表に焦点を置き, 談話分析を用いながら上記の点に関して明らかにする. さらに, 学習者同士がグループ活動を通して協働しながら学びあう協働学習の意義についても考察する.

キーワード リスナーシップ, 英語学習, 談話分析, コミュニケーションスタイル, 協働学習

Listenership in English Learning

Ayako NAMBA

Language Education Center, Okayama University

2-1-1, Tsushima Naka, Kita-ku, Okayama 700-8530 Japan

E-mail: anamba@okayama-u.ac.jp

Abstract This paper aims to explore how listener contributions to co-productions of conversation, called “listenership,” can be applied to English education for Japanese college students. I examine the following three research questions: (1) how listenership can be related to English learning drawing on discourse analysis; (2) how communication styles of Japanese native speakers can be connected to listenership; and (3) how listenership can play a role in the learners getting confidence for communicating with others in English. To answer them, I consider actual contributions of listenership by focusing on speaking activities in my English classes, in particular, English presentations through group projects. Lastly, based on such observations, I will discuss a significant role of cooperative learning between students towards developing the learners’ communication skills in society.

Keyword Listenership, English Learning, Discourse Analysis, Communication Style, Cooperative Learning

1. はじめに

スムーズなコミュニケーションの成立には, 話し手だけではなく, 聞き手の果たす貢献, 「リスナーシップ」¹が大きく影響する. 近年の談話分析を用いた言語研究では, 談話における話し手の言語・非言語行動だけではなく, 聞き手の言語・

非言語行動に関する研究²が行われてきている. 日本語の相槌やうなずきの研究成果 (Kita and Ide, 2007ab; Maynard, 1986; 1987; 1990) から, 日本人のコミュニケーションでは, リスナーシップの役割が大きく影響している. このような背景と大学生の英語教育を関連付けると, 日本人

¹ [12]を参照.

² [1][2][10][12][14]を参照.

大学生がコミュニケーション力の養成を主眼に置いた英語学習に積極的に取り組むためには、授業内の活動の中で聞き手の役割、すなわちリスナーシップについて考慮することも必要である。

これらの背景を踏まえ、本稿ではリスナーシップと英語教育の接点を探るために、

- (1) 談話分析を通して、リスナーシップを英語学習にどのように役立てることができるか
- (2) リスナーシップは日本語話者のコミュニケーションスタイルとどのように関連するのか
- (3) リスナーシップは、英語で他のクラスメイトとのコミュニケーションを図ることに対する学習者の意欲について、どのように貢献することができるか

以上の3点について検討する。これらの調査について、本稿では、談話分析におけるリスナーシップや日本語話者の会話スタイルについての先行研究を関連付けながら、筆者が担当した大学での英語授業におけるスピーキング活動、特にグループによる英語の発表に焦点を置き、リスナーシップが学習者同士による協働学習の中で果たされる役割について考察する。

2. リスナーシップについて

従来のインタラクション研究は、聞き手よりも話し手に焦点を置かれる傾向にあった (i.e. Austin, 1962). そのような傾向の中で、Goodwin (1986: 206)では、スピーチ・アクト理論をはじめとするコミュニケーション理論の多くは話し手を主体にした理論であるため、会話インターアクションの中での聞き手の振舞、そして聞き手が果たす貢献をきちんと扱ってはいないと指摘している。こうした聞き手の重要性について、Tannen (1989: 12)が、『聞くこと』は、受動的なものではなく、実はアクティブなものである。」と指摘するように、会話の中で実際に聞き手がどのようにアクティブな役割を果たしているかを検討していくことが求められている (Goffman, 1981; Goodwin, 1986; Gardner, 2001).

次に、聞き手の役割はそれぞれの状況や会話のコンテキストで変化していくが、Goffman (1981)は聞き手は、「立ち聞きする人」(“overhearer”), 「承認されている人」(“ratified participant”), 「話し手から承認され、注意が向けられている人」(“ratified and addressed participant”)の3種類があると指摘している。このことから、本研究が扱うインターアクションでは聞き手を第3番目のタイプとして想定する。

さらに、会話は話し手と聞き手との相互行為によっ

て産出される (i.e. “joint action”³). この相互産出の中に聞き手の役割が組み込まれており、リスナーシップはこの役割から見出されていくと考えられる。このことから、本研究ではリスナーシップを、「会話の相互産出の中で見出される、話し手により承認され、注意を向けられた、言葉を発してはいないが、会話に参加している者の貢献」(Namba, 2011)と定義する。

3. 日本語話者の会話スタイルにおけるリスナーシップ

上記のリスナーシップの概念を踏まえた上で、日本語話者の会話スタイルがどのようにリスナーシップと関わるのかについて、先行研究を通して考えたい。

Yamada (1997: 38)は、日本語コミュニケーションの基本的な特徴として、聞き手が果たす役割の重要性について述べ(“the listener-based mode”), 日本語話者の文化や社会規範(例「曖昧さ」、「思いやり」、「和」、「ウチ・ソト」、「あまえ」)に由来すると指摘している。このような文化的及び社会的規範の影響を受けながら、日本語話者間のコミュニケーションでは、聞き手の豊富な言語・非言語行動が見られる。その一つとして、Yamada (1997: 37)で取り上げられている「察し」は、聞き手による主体的な働きかけを要するリスナーシップを示す行動として位置づけられるだろう。このような「察し」を含め、聞き手の役割が日本語話者の日常的なコミュニケーションの構築に重要な役割を果たしている (i.e. Yamada, 1997)では日本語コミュニケーションを“Listener Talk”と名付けている。

4. リスナーシップと英語教育の接点

上記に述べたリスナーシップは、談話分析の視点から大学での英語授業においても応用することが可能である。ここでは、初めに談話分析と英語教育について触れ、それを踏まえてリスナーシップと英語授業について考える。

大学における英語授業、特にスピーキングの指導では、談話分析で扱われる視点が大きく関わる。Trappes-Lomax (2004: 155)は、談話分析を英語教育に応用していくことの重要性を述べており、スピーキング力の向上に向けて、会話の構造や会話の予測性(例 会話の始め方や終わり方など)、そして様々な談話のジャンルの区別(例 カジュアルな日常会話、お店の接客などを通してやりとりなど)、様々な会話の規則の区別(例 誘い、申し出、褒め、謝罪に対する返答など)の理解を深める英語指導が必要とされていることを指摘し

³ [11]を参照。

ている。これらの点に加えて、会話参加者同士の人間関係を考慮した言語使用についての指導も、実践的なコミュニケーション力を養うために求められる。

実際のインターアクションを踏まえたスピーキング力の養成に向けて、談話の多層的な特性とより大きな社会的構造を扱った授業活動を考慮することが必要である。以下では、その詳細について説明する。

(1) マイクロレベル

質問・応答練習(話し手の発言に対する聞き手の反応)

(2) メゾレベル

- 発表全体の談話構造
- オーディエンスの反応と質疑応答
- ストーリーテリング(談話構造)
- 聞き手の反応

(3) マクロレベル

- 会話参加者同士の関係
教師・学生、学生同士、先輩・後輩、初対面・知り合い

(1)のマイクロレベルでは、聞き手が話し手の発言に対して反応を示したり、相手の質問に対して応答する細やかな練習を行うことによって、会話の相互構築を目指すものである。

(2)のメゾレベルでは、口頭発表の談話構造に対して、オーディエンスの反応はどのように埋め込まれるのかについて考慮する。例えば、発表中のオーディエンスの反応は頷きや笑いなどの反応が主に見られるが、発表後の質疑応答で、(1)のマイクロレベルの質問・応答を交えた積極的なやりとりが期待される。さらに、話し手の過去の経験などについて語るストーリーテリングやジョークを語るジョークテリング(Sacks, 1974)の談話構造において、語りの最中の聞き手の主な反応としては、頷き、相槌、繰り返しなどが見られるが、語りのクライマックスやパンチラインでは、聞き手の笑い、評価、質問などの反応や応答を含めた話し手と聞き手の活動的なやりとりが予想される。⁴ マクロな談話構造の中に、マイクロレベルの様々な聞き手の応答パターンが埋め込まれ、どのタイミングでオーディエンスまたは聞き手は反応し、またどのような応じ方を行うべきかについて、実際のやりとりや発表経験の中で、学習者は他のクラスメイトとの協働作業を通じ

⁴ ただし、ジョークテリング(Sacks, 1974)の談話構造は主に英語にもとづいた分析のため、日本と欧米圏では語りの中で期待される反応は異なることが予想される。語りの最中に肯定的反応を示すのは日本において好まれるのであって、欧米では語りの中での反応は何らかの否定的な意味合いに解釈される可能性がある。

て身につけていくことが可能である。

(3)のマクロレベルでは、(1)(2)の両レベルを踏まえた上でさらに会話参加者同士の関係を考慮することが重要視される。例えば、発表者に対して、オーディエンスとして教師が質問をする場合もあれば、発表者とオーディエンスがクラスメイト同士の場合もある。また、小グループでストーリーテリングを行った場合、初対面同士、またはよく気の知れた仲間同士によって、聞き手の応答や反応の仕方も様々であることが予想され、相手に配慮をした言語使用が求められる。

実際の授業内のコミュニケーションは、上記3つのレベルの談話と社会構造が複雑に入り組んでいる。また、このような複雑な構造と共に、会話の相互構築にはリスナーシップが密接に関わっていることも明らかである。実際、現実のコミュニケーションはこうした複雑な構造が入り組んでおり、言わば現実のコミュニケーションを考慮した、実践的なコミュニケーション力が養われるような授業活動を行う必要があるだろう。

5. 大学英語授業

上記の点をもとに、筆者が担当したスピーキング活動を重点に置いた英語授業について、リスナーシップの関わりから考察する。

担当した授業は法学部 1 年生(2 クラス)と 2 年生(1 クラス)の英語授業(2010 年 4 月~2011 年 1 月末)で、詳細は以下のとおりである。

English Bridge/Gate(1 年生必修)

- A クラス(23 名)
- B クラス(15 名)

English Theme (2 年生選択必修)

- C クラス(前期: 15 名, 後期: 33 名)

1 年生の English Bridge は前期の授業で、英語の 4 技能の熟達を目指しながらも、主にスピーキングとリスニング力の強化を目標とする。後期の English Gate では、徐々にライティングとリーディングの強化に移行する。1 年生の英語学習をもとにして、2 年生の English Theme では英語の 4 技能の総合的な養成を行う。

筆者が担当した上記のクラスでの授業活動は以下のとおりである。

English Bridge/Gate

- 小グループ発表・議論、個人発表
- グループプロジェクト(リサーチ→パワーポイント発表→エッセイ提出)
- エッセイ作成練習(パラグラフ・エッセイライティング、ピアレビュー)

- CNN ニュース英語のディクテーションと語彙クイズ(前期・後期それぞれ4回ずつ)
- リスニング(BBC/CNN, 映画)

English Theme

- グループ発表・議論(パワーポイント発表)
- ニューステキストを用いて内容の紹介とリサーチ
- グループプロジェクト(パワーポイント発表)

外国を一ヶ国選び、その国に関して興味のあるトピック(文化的または歴史的な視点を含めたもの)をグループで調査し、発表する。その発表を基に、学期末に各学生は1000字以上の論文を提出する。
- エッセイ作成練習(パラグラフ・エッセイライティング, 引用方法, ピアレビュー)
- 小グループ発表・議論
- リスニング(BBC/CNN, 映画)

1年生の English Bridge/Gate では、各学期末にグループによる発表「プロジェクト発表」を行い、発表後各自が発表内容をもとにして500字程度のエッセイを書く。一方、2年生の English Theme では各学期2回ずつグループによる発表または個人発表を行う。2回の発表のうち、1回目はニューステキストのトピックを用いてニュースの内容とグループ内の調査の発表を行う「テキスト発表」とし、2回目は外国に関する好きなトピックについて調査を行い、発表を行う「プロジェクト発表」とする。発表後は1年生同様、発表内容をもとにして1000字以上のエッセイを作成する。ただし、2年生のエッセイライティングでは引用方法と参照文献の提示の仕方について重点を置きながら、アカデミックライティングに結び付けてエッセイを仕上げるように奨励している。

次に、授業内の発表の手順について、1年生が行う「プロジェクト発表」と2年生が行う各学期2回の発表「テキスト発表」と「プロジェクト発表」の詳細は以下の通りである。

English Bridge/Gate

- プロジェクト発表

発表までの準備時間 (リサーチ): 2ヶ月
発表時間: 10分~15分, 質疑応答: 5~10分
司会進行: 発表グループ以外のグループによる交代制
評価表の記入と提出: オーディエンス(各発表者の評価)と発表者(自分の発表の評価)

English Theme

- テキスト発表

トピック: 各グループがニューステキストより1つ選択

ディスカッションポイント: 2点の準備

発表までの準備時間: 1~2週間

- プロジェクト発表

トピック: 自由または外国における文化的または歴史的な視点を含むもの

ディスカッションポイント: 2点準備

発表までの準備時間: 2~3週間

発表時間: 10分~15分, 質疑応答: 5~10分

司会進行: 発表グループ以外のグループが交代制

評価表の記入と提出: オーディエンス (各発表者の評価と発表者(自分の発表の評価))

さらに、上記の「テキスト発表」「プロジェクト発表」の発表者の評価として、評価表を用いる。評価表の記入に関しては、オーディエンスは各発表者を評価し、発表者は発表後に自分の発表を振り返りながら、自己評価を行う。評価表は各授業で回収をし、筆者が全員の評価表をチェックした上で、翌週クラス全体に公開をする。特に発表者にはオーディエンスからの評価を参照し、次の発表に向けて参照することを目的としている。

評価表では、各オーディエンス(発表者)は次の4点、“Eye-Contact,” “Content Logic,” “Visual Aids,” “Voice Inflection” について、1~5の5段階評価で評価をする。5が最高点で1が最低点となる。また、具体的なコメントを記入する欄としては、“Good Points” 及び “Points to be Improved” において、英語で記入する。

次に、上記の発表に含まれるディスカッションポイントでは、各グループの発表で結論を述べた後、発表内容に関連づけた質問2点を、発表者らがオーディエンスに提示する。オーディエンスは4~5人からなるグループで席に座っているため、各質問に対して5分程度英語で話し合い、グループの代表者が話し合った内容をまとめ、クラス全体で議論を行う。

ディスカッションポイントについての話し合いを終えると、質疑応答に移る。質疑応答では、第一にオーディエンスの中で個人的に質問またはコメントがある場合を優先して行い、それらが無い場合は司会者が適当に1~2グループを指定する。指定されたグループは発表内容に関する質問または発表全体などの感想について述べ、発表を終了する。

履修者が残したこの授業評価表の記録にもとづいて、次節では授業実践の考察をする。

6. 考察

授業で行ったスピーキング活動の中で、特にグルー

プによる「テキスト発表」と「プロジェクト発表」に焦点を置き、評価表の結果と筆者による発表の観察を通して、どのようにリスナーシップが関連づけられるかについて検討する。さらに、グループで発表することやクラスメイトと一緒に英語学習に取り組むことの意義についても考える。なお、筆者による発表の観察は、各発表者のパフォーマンスだけではなく、発表中のオーディエンスの様子、そして発表後の発表者とオーディエンスによる質疑応答の様子を含める。

発表者の状況に関して観察した結果、発表者はオーディエンスの反応、ディスカッションポイントや質疑応答でのオーディエンスとのコミュニケーションに大きく影響される可能性があることが分かった。例えば、発表中にオーディエンスから大きな笑いが起これば、クラス全体の雰囲気も明るくなり、発表者は発表についての手応えや充実感を得ていたことが伺われた。またディスカッションポイントや質疑応答中に、オーディエンスから肯定的な反応が見られたり、活発なやりとりが行われた場合、発表者は発表に対して充実感を得やすいことが分かった。

しかしながら、このようなオーディエンス側からの活発な反応が常に得られるとは限らない。オーディエンスからのそのような反応を得るために、発表者側によるオーディエンスの働きかけの工夫も、発表の成功に大きく関わる。例えば、発表者側がディスカッションのリードを行ったり、ディスカッションポイントに対してヒントが提示された場合は、オーディエンスもそのディスカッションの方向性や目的を把握し、双方の間で活発な議論が行われていた。つまり、発表者側の働きかけによってオーディエンスの応じ方は柔軟に変化し、聞き手の応じ方や貢献が発表全体の成功に結びついていった。このように発表経験を通して、発表者は英語で話すことへの自信を得ることが可能である。聞き手からの貢献は、英語のスピーキング活動の中で大きな役割を果たし得ることがわかった。

さらに、英語のスピーキング活動に取り組む上で、クラスメイトと一緒に取り組んでいくことに対して実感を得ることも重要な点である。評価表を観察した結果、英語での発表に充実感を得たというコメントを残した学生の多くは、「クラスメイトから反応や笑いがあったことが嬉しかった。」、「グループメンバーと時間かけてトピックについて調査できたことが楽しかった。」、「自分たちの興味があることについて、クラスメイトの意見を聞くことができたり、意見を交換ができたことがよかった。」など、クラスメイトと一緒に取り組むことへの充実感について触れていた。

以上の点から、英語発表を通して、英語でコミュニケーションを図ることに対して、聞き手またはオーデ

ィエンスからの積極的な参加や反応は発表者にとって大きな励みとなっていることが分かった。同時に発表者もオーディエンスとのコミュニケーションを通して、聞き手やオーディエンスを意識した話し方やリードをする必要性について認識しており、英語発表の中でリスナーシップは重要な役割を果たしていることが観察された。次に、学習者が会話の中で聞き手の反応や積極的な参加について考慮する傾向は、日本語話者のコミュニケーションスタイルやアイデンティティ形成の特徴(e.g. “Listener Talk” (Yamada, 1997))と関連している可能性がある。さらに、学習者が残した評価を通して、グループで英語の発表に協力しながら取り組むことで、学習者はクラスメイトと一緒に課題を通じて英語に取り組む楽しみを見出し、そして友人作りや友情を深めていた。「コミュニケーション力の養成」は、いわゆる英語を話す能力の養成ではなく、他人と人間関係を創造し、深め、そして時には調整をする力を育むことであることを私たちは忘れてはならないだろう。グループの英語による発表活動を通して、学習者の社会的な力をサポートしていくことにつながることも分かった。

7. まとめ

本稿では、談話分析を通して、英語教育におけるリスナーシップ研究の応用について検討した。具体的な検討事項は以下の3点であった。

- (1)リスナーシップをどのように英語教育に応用することが可能であるか
- (2)日本語話者の会話スタイルとリスナーシップはどのように関わるか
- (3)英語学習に対する充実感や自信の獲得にリスナーシップはいかにして貢献できるか

(1)では、リスナーシップはマイクロ・メゾレベルの談話構造とより大きなマクロレベルでの社会構造とが密接に関わりながら活発に機能しており、実践的なコミュニケーション力の育成に向けた英語学習においても、談話と社会が複雑に入り組んだ多層性を考慮することが重要であることを述べた。

(2)では、日本語話者を対象にした英語教育におけるリスナーシップとの関わりについて検討した結果、日本語話者の会話スタイルやアイデンティティが関連していることを指摘した。Yamada (1997: 38)が日本語のコミュニケーションにおける聞き手が果たす役割の重要性について述べているように(“Listener Talk”, “the listener-based mode”), この重要性は、学習者の日常のコミュニケーションスタイルやアイデンティティ形成

とも関わることを言及した。さらに、英語の授業内でも英語学習者のコミュニケーションの構築に、リスナーシップは大きな役割を果たしていることを指摘した。

(3)では、(2)における授業内のコミュニケーションとリスナーシップの関連性を具体的に探るために、筆者が担当した英語の授業内におけるスピーキング活動に焦点を置き、特にグループによる英語発表について考察した。その結果、発表者は英語発表を通して充実感や自信を得ていることや、オーディエンスが示すリスナーシップがこのことに少なからず影響をしていることが、授業評価や筆者の観察を通して分かった。会話の相互行為や、発表者からの発信に対する聞き手の反応が要であり、聞き手との円滑なやりとりを通して発表者は英語の取り組みに対して充実感や自信が得られるようになることを指摘した。さらに、クラスメイトと協力し、協働しながら英語に取り組む中で、学習者は他人への関わり方などコミュニケーションの図り方についても同時に学ぶことや、クラスメイトと一緒に取り組むことへの充実感を実感することが可能であることを述べた。

文 献

- [1] Kita, Sotaro, and Sachiko Ide, "Backchannels, nodding, and final particles in Japanese conversation: How conversation reflects the ideology of communication and social relationships," *Journal of Pragmatics*, 39(7), 1239-1241, 2007a.
- [2] Kita, Sotaro, and Sachiko Ide, "Nodding, aizuchi and final particles in Japanese conversation," *Journal of Pragmatics*, 39(7), 1242-1252, 2007b.
- [3] Maynard, Senko, "On backchannel behavior in Japanese and English casual conversation," *Linguistics*, 24, 1079-1108, 1986.
- [4] Maynard, Senko, "Interactional functions of a nonverbal sign: Head movement in Japanese dyadic casual conversation," *Journal of Pragmatics*, 11(5), 589-606, 1987.
- [5] Maynard, Senko, "Conversation management in contrast: Listener response in Japanese and American English," *Journal of Pragmatics*, 14, 397-412, 1990.
- [6] Austin, John, *How to do things with words*, Harvard University Press, Cambridge, 1962.
- [7] Goodwin, Charles, "Between and within: Alternative sequential treatments of continuers and assessments," *Human Studies*, 9, 205-217, 1986.
- [8] Tannen, Deborah, *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*, Cambridge University Press, Cambridge, 1989.
- [9] Goffman, Erving, *Forms of talk*, University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 1981.
- [10] Gardner, Rod, *When listeners talk*, John Benjamins, Amsterdam, 2001.
- [11] Clark, Herbert, *Using language*, Cambridge University Press, Cambridge, 1996.
- [12] Namba, Ayako, *Listenership in Japanese interaction: The contributions of laughter*, Doctoral dissertation, The University of Edinburgh, 2011.
- [13] Yamada, Haru, *Different games, different rules*, Oxford University Press, Oxford, 1997.
- [14] Trappes-Lomax, Hugh, "Discourse analysis," Davies, Alan and Catherine Elder (eds.), *The handbook of applied linguistics*, 133-164, Blackwell Publishing, Oxford, 2004.
- [15] Brown, Roger and Albert Gilman, The pronouns of power and solidarity, Sebeok, T. A. (ed.), *Style in language*, 253-276, MIT Press, MA, 1960.
- [16] Sacks, Harvey, An analysis of the course of a joke's telling in conversation, Bauman, Richard and Joel Sherzer (eds.), *Explorations in the ethnography of speaking*, 337-353, Cambridge University Press, Cambridge, 1974.